

# 赤ひげ先生 奮闘記!

Vol.7

訪問診療医として地域医療に貢献する服部努先生の現場に同行。そこには、患者とその家族に安心を届ける、細やかで温かな医療の姿がありました。

## 在宅医療の受け皿をつくり 患者さんを「日常」に戻す

「こんにちはー。たんぼぼです」。元気のよいあいさつと共に、患者さんのお宅に入っていく服部先生。2008年に在宅医療に特化したクリニックを開院し、NICU（新生児集中治療室）から退院したばかりの乳児や末期がんの患者さんなど、長久手市や周辺地域に暮らす約130人の患者さんを24時間体制で診ています。

訪問診療の現場では、病気の

患者さんとご家族が安心して「日常」を送れるようサポートしていくのが、在宅医療を担う我々の役割です。



### PROFILE

たんぼぼクリニック院長(愛知県)

#### 服部 努先生

はっとり・つとむ 1992年金沢医科大学医学部卒業。沖縄県立中部病院、近畿大学医学部附属病院などで研修医として働く。00年愛知医科大学大学院卒業。04年より同大学病院呼吸器・アレルギー内科に勤務。05年在宅診療に転じ、笹本内科医院勤務。08年たんぼぼクリニック開院。



上：診療は医師と看護師2名が車で向かう。患者さんとの時間を長くもちたいため、ひたすら抜け道を選んで行く。右：バッグには診療に必要な物がコンパクトに取められている。



### Private column プライベートコラム

#### 慌ただしい日常を癒やしてくれる 植物や動物を育てるひと時

休日であろうと、夜中であろうと、呼び出しがあればすぐに患者さんのもとへ駆けつける態勢ゆえ、完全なオフはなし。遠出しにくいいため、自宅で気分転換できる方法を模索中。最近では庭で果樹を育てたり、モモンガや金魚を育てたりするのが息抜きの時間になっているそうです。

種類や状態も様々な患者さんを診るため、幅広い知識と柔軟な対応力が必要とされます。「毎日いろいろなことが起こります。最期を看取るなどつらい場面もたくさんある。でもね、我々が行くと患者さんが喜んでくれるから、それがうれしくて。慌ただしいながらも楽しく過ごしています」。

服部先生が訪問診療医を志したきっかけは、病院勤務の頃。自宅に戻りたくても在宅医療の受け皿がないために、病院で亡くなる患者さんを多く目にしたことにあります。「病院は病気を治すために行く所であり、非日常的な場所。改善の余地がないのであれば、病院に居続けるよりも、自宅で家族と一緒に日常を過ごしたほうがよいのではないか。その受け皿がないなら、自分がなろうと思った」と服部先生。患者さんを「日常」に戻し、「患者」ではなく、1人の「家族」に戻してあげたい。これは、今も変わることなく、服部先生の信念となっています。

#### 患者さんだけでなく 家族や暮らしも診ていく

「患者さんだけでなく、家族や暮らしも見えるのが訪問診療の大きな特徴。だからこそ、心がけなければいけないこともあると言います。「在宅医療で一番大変な思いをされているのは、患者さんのご家族。自分がその立場だったらどうして欲しいのかを考えながら、その家族に寄り添ったサポートをしていきたい」。家族が患者さんと共に安心して生活できるよう、最善の医療体制で臨んでいます」。



在宅医療は、医師や看護師、訪問介護員などがチームとなり、患者さんと家族を支える。患者の情報共有もこまめに行う。